大山平一郎～演奏家としての歩み

Music Dialogue 芸術監督 大山平一郎さん（以降 大山先生）が今に至るまでの歩みをインタビューを基にまとめました。改めて、ものすごい人物です。楽しみながらお読みいただけますと幸いです。

京都生まれ。

ご両親は共に、博多生まれの為
大山先生は「京都生まれ、血は博多」と表現していた。

大山先生がお好きだという野球の球をかいてみました。

父の強い思いで幼少期からヴァイオリンを学んだ大山少年
スズキメソードに

音楽家のお家というワケではなかったんですね。

息子をヴァイオリニストにというのが、ボクの父の願いで、ボクとしては同じの子たちみたいに野球や剣道がやりたいって思ってたね。

京都 ―か―ら→ 東京へと
月に2回ほど通っていたそう。

今のように新幹線があったわけではないのですごく大変だったことでしょう…

高校生から一人で上京し、下宿で暮らす。

桐朋学園（東京）に入学

江藤俊哉、鷲見三郎、斎藤秀雄に師事

斎藤秀雄（さいとう ひでお）氏
（チェリスト・指揮者）

授業でオーケストラを行い、それを指揮、その指揮を通して音楽の本質を教えてくれてたと大山先生はお話されていました。

若き大山少年はこのオーケストラでコンマスを務めていた。

斎藤秀雄氏と大山先生のエピソード

アメリカの大型車がお好きだった斎藤氏
同じく車好きの大山先生は先生と生徒でありながら
なんと斎藤氏の運転手もしていたそう。
音楽以外でも重宝されていたことが伺えます。

1968年 英国へ留学

ギルドホール音楽学校へ

ヴァイオリンソロになるために渡った英国、大学の寮でピアノトリオ（つまり室内楽！）にはまり、在学中にはBBCコンクールに出場、そして優勝。

あっそう

このお返事はいろいろな意味でショックが大きかったのではないかなあ 大山先生にとって。

はじめての優勝だったという大山先生
日本にいるお父さんに報告の電話をしたところ返ってきた反応は「あ、そう。」
さらには、ヴァイオリンソリストになるために留学させているのであって室内楽であそばせるためではないといったお怒りの言葉まであったそう。

オーケストラやソリストに比べると室内楽は日の当たらない存在、でも大山先生はここから室内楽の道へ

パリで行われたオーディションにて奨学金をとりヴァイオリニストのギンゴールドから指導をうけるため、

1970年 米、インディアナ大学へ

奨学金をうけているため、ヴァイオリン以外の違う単位もとる必要があった。それがないと卒業できない！

当時のボクの英語力は皆無だったから、音楽学校時代に弾いたヴィオラで単位をとろうと思ったんだよね。

当時、音楽学校には、「ヴィオラ科」は無くオーケストラ内等ではヴァイオリンの学生がヴィオラを弾くこともよくあった。大山先生もそういうきっかけでヴィオラを時々弾いていたんだそう。

しかし！

インデアナ大学にいたプリムローズ教授は、「僕は副科の生徒はとらないよ。」と一言

どうか オーディションだけでもしていただけないでしょうか？

ひいたところ…

演奏をきいたプリムローズは、うーん、いいか と大山先生を生徒に!!

ウィリアム・プリムローズ ヴィオラ奏者界の神!!

ちなみにヴァイオリンの先生であったギンゴールドも 米のヴァイオリン界の神

そうして毎週ヴァイオリンとヴィオラ、2つの楽器でギンゴールドとプリムローズの指導を受けることに！
音楽的にヴィオラをここから弾くようになった。

1972年 マルボロ音楽祭にヴィオリストとして参加

Marlboro Music School & Festival
マルボロ音楽祭とは、

夏の間、アメリカ ヴァーモント州、マールボロで
ひらかれる音楽祭のこと。奏者は推薦がないと
この音楽祭に参加することはできない。
若手奏者たちが巨匠と共演したから室内楽を学ぶ
40～50人が参加する。

若きヨーヨーマともここで共演している

これだけの神様たち（巨匠）と
みっちり音楽について対話ができる
学ぶことに貪欲な若者達にとって、
最高の学びの場。← ミュージック ダイアログの原型!?

観覧の予約？ どうもちがうようだけど…

これ参加するってことだよ！

招待状が届いた大山先生、
しかしオーディションもしていない
ため演奏をききにいく側かと
最初は思ったそう。結果は
ヴィオリストとしての参加招待状だった！
その後3年間ほど参加、米ツアーにも2回参加している

本科のヴァイオリンではなく副科のヴィオラで!?

実は、マルボロ音楽祭の関係者が神（プリムローズ）にヴィオラ奏者について電話をしたそう。話の流れで「最近日本人の弟子をとったんだって？どう？」ということに
「あいつならいいんじゃない？」と大山先生の知らないところで参加の手はずが整ったという。

マルボロ音楽祭のアルバムをみながら、

神様

ギリシャ神話並に神がいる。

これも神様

この参加をきっかけにボクは社会的にヴィオリストと認識された。

両教授の顔をたてるためボッとしたといいます。

天才！そこで終わらないのが大山先生なのだ!!

天学内コンクール
ヴァイオリン
ヴィオラ
両部門で
1位 同時に！
を獲得

すごすぎて…

1973年 米、カリフォルニア大学の助教授に就任

23～24歳頃

今々

ヴァイオリンとヴィオラの両方を学生におしえていた。
ヴィオラを弾く人は少なく、どちらも指導できる大山先生は大学としてはとても良い人材だったことでしょう。

大谷ならぬ大山だったワケだ
ヴァイオリンとヴィオラの二刀流

2003年までヴァイオリンヴィオラどちらもおしえていた

翌年、1974年 NY国際ヤング・コンサート・アーティスト賞を受賞

アシスタントコンダクターとして来た指揮者のチョン・ミョンフンと仲良くなった大山先生、

すばらしかったよ。
え!?
まいったな…

演奏どうだった？
じゃあ平一郎がやればいい

すごいピアニストでもあったミョンフンとは
音楽についてお互いとても信頼し合っていた為
彼の指揮について2人で話すこともあった。
あたかも指揮ができるような空気がでていたためか
偵察へ行って来てといわれたクロスロードで
高校生の指揮をすることに～!!
現場での体験を基に独学で指揮者の道にも
夏のラウンドトップ音楽祭でも指揮を務める。

1979年 ロサンジェルス・フィルハーモニック首席ヴィオラ奏者に任命

カルロ・マリア・ジュリーニが率いていた西海岸で唯一TOPに入っていたオーケストラ

ヴィオラ奏者でもあった

すんなりこのオーケストラに入ったということでもなく…ヘッドハンティングされた大山先生、オーケストラをやるつもりはなかったことから断ったそう。
あきらめないジュリーニ、入団試験のやり方も疑問があった大山先生、
入団テストなしのメンバー入りという異例の入団となったそうです。

室内楽をやる、アンサンブルをやれる人を呼びたかったのかなあ

首席は組織のシステム上、指揮者に質問ができる。巨匠から直接音楽づくりのことについて会話ができたこの経験はその後指揮をする上でとても良い糧になったそうです。突然出て来た"指揮"なんと大山先生、ここから指揮者にもなってゆくのです…。えー!?

1986年 ラホイヤ室内楽音楽祭の芸術監督に就任。

WiN WiNの関係

演奏家を民泊させるというシステム。ホストは文化活動をサポートしているというプライドを得ることができる。宿泊費等がそこでかからない分、著名な音楽家も呼ぶことができた。
才能ある若手の音楽家を呼び、マルボロで自身が経験したような学びの場を作った。
活動の場を一ヶ所で終わらせない継続的なサポートをしていくエコシステムを作っていく。

プロデューサー的な才能まであるのか！

同年、ロサンゼルス・フィルハーモニックを指揮

1987年 アンドレ・プレヴィンにロサンゼルス・フィルハーモニックの副指揮者に任命される。

と、ということは、ご自身のいたオーケストラの副指揮をしていたと!? 逐手兼監督 じゃないか！

今までの経験上あまり喜ばれないだろうと思いながら父に電話をすると予想外の好反応が返って来て、指揮者で良いなら最初から言ってよとうれしそうに大山先生は話されていた。

定期コンサート、ハリウッドボール、青少年LA交響楽団
夏季トレーニング：オーケストラを指揮する。

そのハードワークはLAタイムズで"1番仕しい演奏家"として紹介されるほど

その後も、
オペラ・リオン（イム）
ロイヤル・フィルハーモニック管弦楽団（英）
ボルティモア響（米）
ハレ管弦楽団（英）
サンフランシスコ響 などと共演。
日本でも、京都市交響楽団
読売日本交響楽団
新日本フィルハーモニー、札幌交響楽団
など多くのオーケストラの指揮をしている。

とにかくすごい数…

1991年
ロサンゼルス日本交響楽団の
音楽監督兼指揮者 就任
1992年
サンタフェ室内音楽祭芸術監督
1973～2003年
カリフォルニア大学教授
1982～2017年
サンタバーバラ室内管弦楽団音楽監督
まだまだあるのでヨ…

こんな語りきれない経歴を持つ、

大山平一郎氏が芸術監督を務める。
"Music Dialogue" 2024年10周年を迎えます。

今、日本で育った奏者は技術を高めるというステージは終わり、ヨーロッパ・アメリカと対抗・対応できるレベルになった。
弾けるだけではなく、哲学が話せる人を育てないといけないよねとはじまったのがMusic Dialogue

こんなにすごい人が目の前で話しているというのを忘れてしまうのは、きっと大山先生自身がとてもサービス精神あふれる方でユーモアたっぷりにお話してくれるから。

大山先生のお話をきいていて感じたのは、ヴァイオリン
ヴィオラ、指導者、指揮者、プロデューサーとして得たあらゆる
引き出しをすぐに開けれる状態にし、相手に合わせてその人が
一番理解しやすく落とし込みやすい言葉の選択の的確さ。

自分で音楽がやりたくてと始めた道ではないけど
目の前のものを懸命にやったらそのうちに色んな機会をいただいた。やるからにはこうという人が周りにたくさんいてくれて導いてもらったって感じで、
やるからには全力を尽くすがモットー。実は結果はそれに伴って生まれてくると思っている。

Music Dialogueを通してまいていた種が少しずつ土から芽吹きはじめたようにこの頃思う。という課、今後もより楽しみです。

その才能と努力をもって原石のきらりとするところをみがいてくれるんだと思いました。そして大山先生自身が体験された巨匠たちとの音楽の対話がもたらす、多くの学びの重要性が取材を通して分かり、Music Dialogueを通してやろうとしていることが日本の音楽の世界をさらに鮮やかにしてくれる気がしました。

絵と文 赤坂董 Sumire Akasaka

取材にご協力いただいた、大山平一郎先生、伊藤美歩さん、小室敬要さん ありがとうございました。